

(19)



JAPANESE PATENT OFFICE

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: **53122489 A**

(43) Date of publication of application: **25.10.78**

(51) Int. Cl

G01N 33/16
A61B 10/00
G01N 21/00
G02B 21/00

(21) Application number: **52036200**

(22) Date of filing: **01.04.77**

(71) Applicant: **OLYMPUS OPTICAL CO LTD**

(72) Inventor: **SAWAMURA ICHIRO**
NAKAMURA YASUHIRO
YONEKUBO TAKESHI

(54) **CANCER DIAGNOSIS APPARATUS BY**
FLUORESCENT POLARIZATION PHOTOMETRIC
MICROSCOPE

(57) Abstract:

PURPOSE: To automatically diagnose whether cancer or not by applying polarized excitation light to the

specimen comprising separating only the lymphocytes from the blood of the person to be examined and mixing cancer protein therein to produce fluorescence and processing electrically the degree of polarization of the fluorescence.

COPYRIGHT: (C)1978,JPO&Japio

⑩日本国特許庁
公開特許公報

⑪特許出願公開
昭53-122489

⑫Int. Cl.²
G 01 N 33/16
A 61 B 10/00
G 01 N 21/00
G 02 B 21/00

識別記号

⑬日本分類
113 E 6
104 B 34
94 A 1

府内整理番号
7363-23
6351-23
7437-54

⑭公開 昭和53年(1978)10月25日
発明の数 1
審査請求 未請求

(全 3 頁)

⑮蛍光偏光測光顕微鏡によるガン診断装置

⑯特 願 昭52-36200

⑰出 願 昭52(1977)4月1日

⑱発明者 沢村一郎

八王寺市めじろ台3の23の12

同 中村保博

八王子市鶴田町1210

⑲発明者 米窪健

八王子市松が谷21の5の3

⑳出願人 オリンパス光学工業株式会社
東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番
2号

㉑代理人 弁理士 篠原泰司 外1名

明細書

1.発明の名称

蛍光偏光測光顕微鏡によるガン診断装置

2.特許請求の範囲

シャッターを有する観察用照明系と、シャッター、偏光子および励起フィルターを有する蛍光偏光測光照明系と、被検者のリンパ球にガン細胞のタンパクを混ぜた試料に上記測光照明系により励起光を照射しこれにより発した蛍光で検光子を通過した光を受光する受光素子と、上記受光素子よりの電気信号をもとに偏光度を算出する演算回路とを備えた蛍光偏光測光顕微鏡によるガン診断装置。

3.発明の詳細な説明

本発明は蛍光偏光測光顕微鏡を用いたガン診断装置に関するものである。

最近被検者より採取した血液にガン細胞より取出したたん白を混ぜたものをFDA(Fluorescein diacetate)にて染色し、これに偏光した励起光をあて蛍光を発せしめ、この蛍光の偏光度を測定することによつてガンの診断を行なう方法が発見さ

れた。それはガン患者のリンパ球はガン抗原(ガンたん白)によつて特異的に反応し、リンパ球がこの抗原あるいはこれと類似の物質に接すると何らかの刺激を受ける。そしてこのリンパ球の刺激によつて起こされる細胞質の変化が極めて短時間に細胞の蛍光偏光という物理的性質の変化として検出されることによる。したがつて、前述のように被検者の血液からリンパ球だけを分離しこれにガンたん白を混ぜたものをFDAで染色しこれに偏光した励起光をあてた時に発する蛍光のうち励起光と同じ振動方向の成分をI₀、これと垂直の振動方向をもつ成分をI₉₀とすると

$$P = \frac{I_{90} - QI_0}{I_{90} + QI_0} \quad (Q \text{ は定数})$$

で求められる蛍光偏光度Pを求めれば良い。この蛍光偏光度Pの値は正常人では1.19~1.59であるのに対し、ガン患者では0.66~0.86である。そしてこの方法はガンたん白を変えることにより被検者がガン患者の場合、ガンの種類も判定することが出来る。

本発明は上述の診断方法をもとにして、試料に

偏光した励起光をあて蛍光を生ぜしめ、この蛍光の偏光度を算氣的に処理することによつてガンであるか否かの診断を自動的に行ない得るようにしたガン診断装置を提供するものである。

以下本発明装置の詳細な内容を説明すると、図において1は光源、2はコレクターレンズ、3はシャツター、4はコンデンサーレンズでこれらで一般の観察用透過照明系を構成する。5は試料、6は対物レンズである。又7は超高压水銀灯等よりなる蛍光測光用光源、8はコレクターレンズ、9はシャツター、10は偏光子、11は励起フィルター、12は励起光を反射し蛍光を透過するような特性を有するダイクロイツクミラーで対物レンズ6を含めこれらで落射蛍光偏光測光用照明系を構成し、偏光した励起光にて対物レンズ6により試料5を照明する。又13は励起光を吸収する吸収フィルター、14は半透過プリズム、15は接眼レンズ、16はウォラストンプリズム等の検光子、17a, 17bは受光素子、18aは増幅器、19は演算処理回路、20は表示装置である。

(3)

明系に夫々シャツターを設けて、簡単な操作で両照明系を切換え使用するようにしたので、例えば励起光による試料の照明は測光時のみ行なうことが出来蛍光消光による影響を防止し得る等、精度の高い判定が可能である。

尚、実施例の説明では測光照明系として落射照明を用いているが、透過照明にすることも可能である。又検光子にはウォラストンプリズムを用い二成分に分離して両成分を検出しているが、検光子を90°回転させこれと受光素子とを同期させることにより両成分を検出するようにしても良い。又、蛍光が弱いために受光素子としては高感度のものが用いられるが、この受光素子に強い観察用の照明光が入射することは好ましくない。したがつて受光素子の前方適宜位置にもシャツターを設け、測光の時だけ光が受光素子に入射するようにしても良い。

4. 図面の簡単な説明

図面は本発明のガン診断装置の構成を示す図である。

(5)

このような光学系において、前述のようなガンか否かを判定すべき試料をおさめシャツター3を開き、シャツター9を閉じた状態で、試料を観察用透過照明系にて照明し、接眼レンズ15にて観察しながら対物レンズのピント合わせを行ない又、試料中の測光すべき部分を定める等する。次にシャツター3を閉じシャツター9を開いて落射蛍光偏光測光照明系による照明を行なう。これによつて偏光された励起光にて照明された試料は蛍光を発し、この蛍光はウォラストンプリズム16を介して受光素子17a, 17bによりその直交する二つの偏光成分が受光され、増幅器、演算処理回路を通して前述の偏光度Pが算出され、ガンであるか否かが判定され、その結果が表示装置20に表示される。

以上説明したように本発明のガン診断装置によれば、その結果が自動的に表示されることは勿論、顕微鏡による測光を行なうので、試料は極めて微細で良く、ガンの集団検診に用いれば極めて有効である。又観察用照明系および蛍光偏光測光用照

(4)

1…光源、3…シャツター、5…試料、6…対物レンズ、7…測光用光源、9…シャツター、10…偏光子、11…励起フィルター、12…ダイクロイツクミラー、16…検光子、17a, 17b…受光素子。

代理人 篠原泰司

向 寛二

(6)

